

年間第三十主日

2018.10.28

マルコ 10・46-52

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音はバルティマイの物語です。新共同訳のマルコ福音書を開いて、順を追って小見出しを拾い読みするだけでも、今日のエリコの町でのエピソードは、イエスが人々の求めに応じて行ってくださった、数々の奇跡の最後のものであることが分かります。この後、エルサレムに行かれ、そこで過ごされた最後の日々には、イエスはもうこれまでのような奇跡を行われることはありません。エリコの町を出立してエルサレムに向おうとしておられるイエスにすがりつくようにして、最後のぎりぎりのところでその願いを聴き入れていただいたバルティマイは、それだけでも聖書にその名が記されるに値する幸せな人と言えるのではないのでしょうか。

「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」。いつものように、道端に出て物乞いをしている自分の前を通り過ぎてゆく人々の足音が、イエスの一行であること知ったとき、バルティマイはこのような叫び声を挙げたということです。道端に座って物乞いをするしか、他に生業のすべを持たないバルティマイの目の前をたまたまイエスが通り過ぎただけのことだったのでしょうか。そうだとしたら、バルティマイはあのような叫びを挙げはしなかったはずです。ダビデの子という呼び名は、イエスの時代のユダヤ人であれば、誰でもが知っていた、神が遣わしてくださるはずのメシア、救い主の呼び名です。ナザレのイエスが行われたという数々の奇跡のうわさは、通りすがりの人々の口を通して、バルティマイの耳にも入っていたことでしょう。イエスの評判を聞いたときから、バルティマイの心のうちに、一つの希望の光がはっきり灯り始めたというのは考えすぎでしょうか。エリコの町は、エルサレムに上って行く巡礼者たちが必ず通る街道の最後の宿場です。ナザレのイエスが人々の言うように、本当にメシアなら、いつの日か、必ずここを通るはずだ。バルティマイはそう思ったに違いありません。エルサレムはメシアがその座に着くはずの都だからです。バルティマイは道端で物乞いをしながら、この日を待ち続けたいたはずです。そうでなかったら、自分の前を通り過ぎて行ったその人に向かって、あのような叫びを挙げはしなかったことでしょう。

「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」。自分の前を通り過ぎて行かれたイエスの背後から、バルティマイは必死になって叫び続けました。そのバルティマイをイエスに従う人々は、押さえつけるようにして黙らせようとしたの

です。道端で人様の憐れみを乞うしか能のない、盲目の男に何が分かるか、人々はそのように思ったことでしょう。

バルティマイの必死の叫びはイエスに届いていたのです。「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」との彼の叫びはイエスの心を揺さぶっていたのです。

「あの男を呼んできなさい」。イエスのこのことばによって、座って物乞いをしていたバルティマイとイエスの間を隔てていた道行く人々の人垣は一気に崩れ、さえぎるものは何もなくなったのです。開かれたイエスへの通路を、バルティマイは躍り上がって、イエスのもとへ駆け寄って行きます。福音書のこの語り方は、バルティマイの目にはもうイエスのお姿がはっきりと見えているような印象を与えます。彼は誰の助けも借りずに、真直ぐにイエスのもとに駆け寄って行きます。

「何をしてほしいのか」。イエスにそう問われたとき、バルティマイは自分の口をついて出たことばにうろたえたかもしれません。「先生、目が見えるようになりたいのです」。今やイエスのお姿がはっきりと見えているのに、自分は何を言っているのだろう。バルティマイは自分が言っていることばに、おかしくなり、そして言い表すことが出来ない喜びが心の底から突き上げてくるのを感じていたかも知れません。「そうだったのだ。長い、長い年月、自分がひたすら願っていたことはこのことだったのだ」。今さらながら、バルティマイは自分が何に希望をおいて生きてきたのか、そしてそれが自分にとって如何に苦しいことであったか瞬時に悟ったに違いありません。バルティマイが口にした「ラッポニ、先生」というイエスへの呼びかけは、普通人々が敬称として用いていたラビという呼びかけを超えた、特別な響きを持っています。それはヨハネ福音書が語る復活のイエスに出会ったマグダラのマリアの口をついて出たのと同じ、親愛の情に満ちた、歓喜の呼びかけです。バルティマイが自分の目で見ることが出来たイエスは、マグダラのマリアが園丁だとばかり思っていたその人が、自分が捜し求めていたイエスだと分かったときに見ることができたのと同じイエスです。そのイエスに向かって、バルティマイは、マグダラのマリアのあの呼びかけを先取りするかのよう、イエスに向かって「ラッポニ」と呼びかけているかのようです。そんなバルティマイの様子をご覧になりながらイエスは微笑を浮かべて、「あなたの信仰があなたを救った」と語りかけてくださったのではないのでしょうか。

「あなたの信仰があなたを救った」というイエスのことばは、わたしたちにもう一人の女性のことを思い出させます。それは、マルコ福音書の 5 章で語られていた、12 年間も人に言えない病に苦しんできた一人の女性です。彼女も今日のバルティマイと全く同じように、道を行かれるイエスの後ろからイエスに追いつくようにして、イエスを振り向かせた信仰の持ち主でした。

「行きなさい、あなたの信仰があなたを救った」。イエスにそう言われた盲目の人であったバルティマイは、すぐに見えるようになって、なお道を進まれるイエスに従ったと、今日の福音は締めくくられています。不思議なことに、この最後の場面には、ここまでイエスにつき従ってきた他の弟子たちの姿はありません。もちろん、他の弟子たちもイエスにつき従って、エルサレムへの道を登って行ったことに違いはないのですが、ここでの福音書のスポットライトはイエスによって見えるようにしていただいたバルティマイだけに当てられています。イエスに従う他の弟子たちの後ろについて、バルティマイもイエスの後に従ったのでしょうか。福音書の語り方は、そうではないような印象を与えています。むしろ、バルティマイはイエスにつき従う弟子たちの先頭に立って、エルサレムへの道に行くイエスの後に従ったような印象を与えます。もし、それが事実であるなら、ここまでイエスにつき従って来た弟子たちは、先々週の福音でわたしたちが聞いた、全てを捨ててイエスに従う者たちに約束された永遠のいのちについてイエスが語られたことばを思い起こしていたかもしれません。そのおことばの最後に、イエスは「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」という謎めいたことばを語られたのでした。これは、想像の上の話ですが、ずっと後になってイエスの復活後、弟子たちは今日のエリコの町での出来事を思い出しながら、イエスが言われたことを人々に語ったかもしれません。「主が言われたことは本当だった。バルティマイという男は最後に主に従ったのだけれども、自分たちよりずっと主の近くから主を理解し、主に従って行ってしまった」。こんなふうに、バルティマイの物語は語り継がれ、福音書の中に彼の名前と一緒に書き記されることになったのかもしれませんが。

バルティマイという一人の人とイエスとの出会いの物語を伝える今日の福音は、わたしたちにどのようなことを語りかけているのでしょうか。イエスの弟子たちの間でバルティマイのことが語り告がれたように、わたしたちも今日の福音を受け取ることができたらと思います。「あなたの信仰があなたを救った」。わたしたちの教会の中にも、今日のバルティマイやイエスによって出血症を癒していただいた女性のように、イエスのこのおことばによって救われた人たちがきつといるはずです。そしてそのことを皆で喜び合い、自分たちのイエスに従う信仰の助けとすることが出来る、そんな教会共同体に成長して行けるよう祈りあいたいと思います。